

平成 24 年度野幌自然環境モニタリング検討会  
(第 15 回：現地検討会)

議事次第

平成 24 年 10 月 25 日 (木) 10:00~12:30

良好な自然林、森林の家 ほか

- 1 開 会 (森林の家)
- 2 日程等説明
- 3 現地検討
  - ① 40 林班は 3 小班：ハンノキ林 (良好な自然林、H24 調査地)
  - ② 40 林班ろ小班：ハンノキ・ヤチダモ林 (良好な自然林、H23 調査地)
  - ③ 50 林班と小班：トドマツ林 (人工林、昭和 46 年植栽、H24 調査地)
- 4 室内討議 (森林の家)
- 5 閉 会 (森林の家)

## 野幌自然環境モニタリング検討会出席者名簿

(平成24年10月25日)

### 委 員

春木 雅寛 北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授

平川 浩文 森林総合研究所北海道支所森林生物研究グループ主任研究員

堀 繁久 北海道開拓記念館企画調整課長・学芸第一課長

村野 紀雄 地域自然保全研究室主宰

矢島 崇 北海道大学大学院農学研究科教授 (座長)

～50音順～

### 事務局等

平野 均一郎 北海道森林管理局計画部長

道音 雄三 北海道森林管理局企画官(自然再生)

渡辺 洋之 石狩地域森林環境保全ふれあいセンター所長

山口 裕司 FRS コーポレーション(株)

ほか

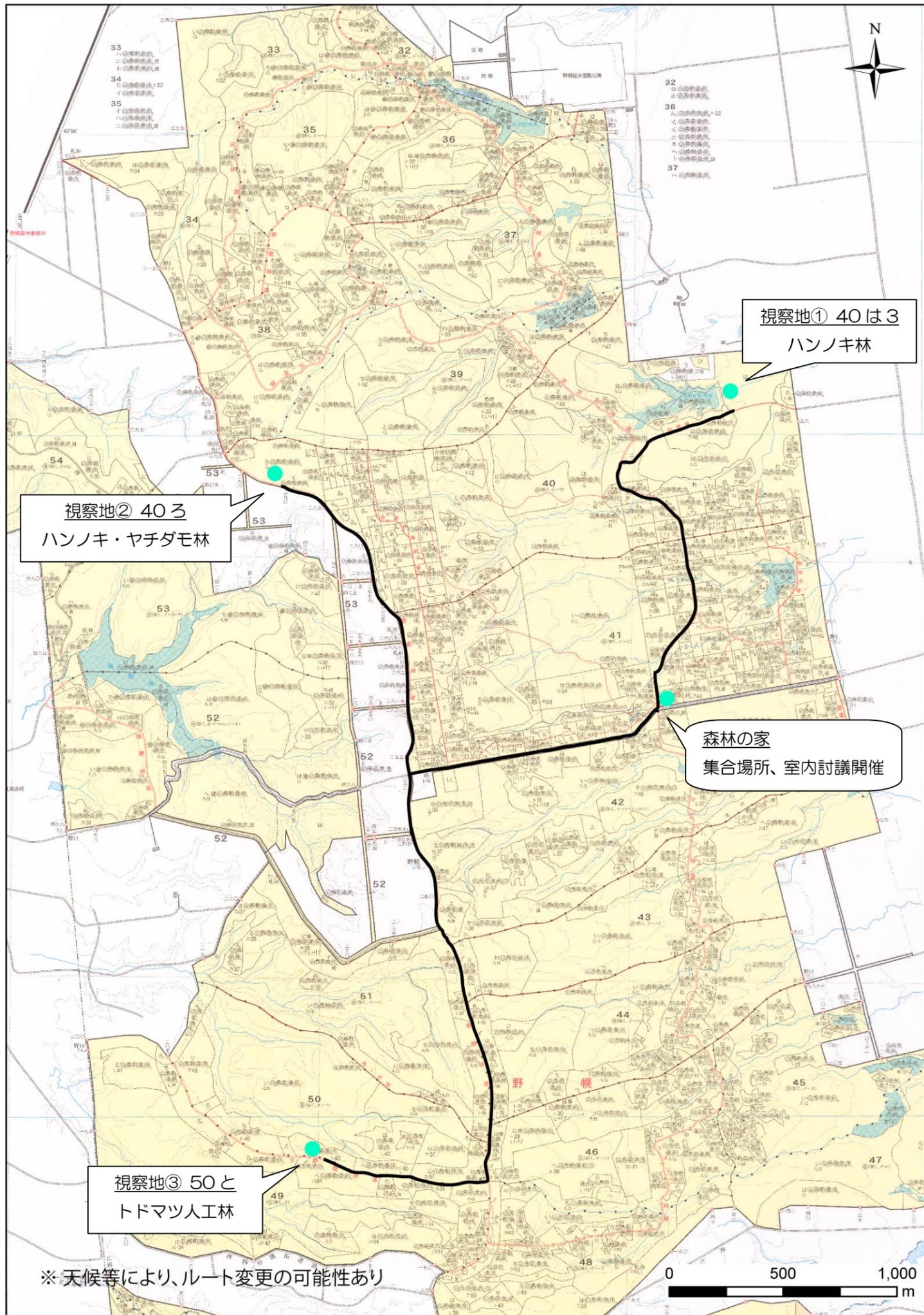


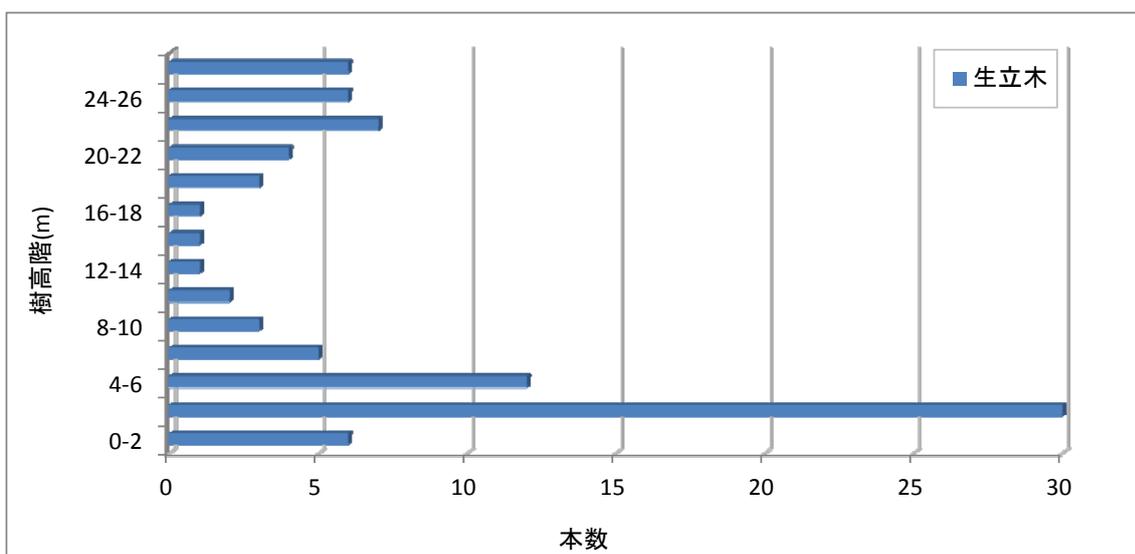
図 視察箇所および予定ルート

## 視察地②：40 林班ろ小班 ハンノキ・ヤチダモ林（良好な自然林）

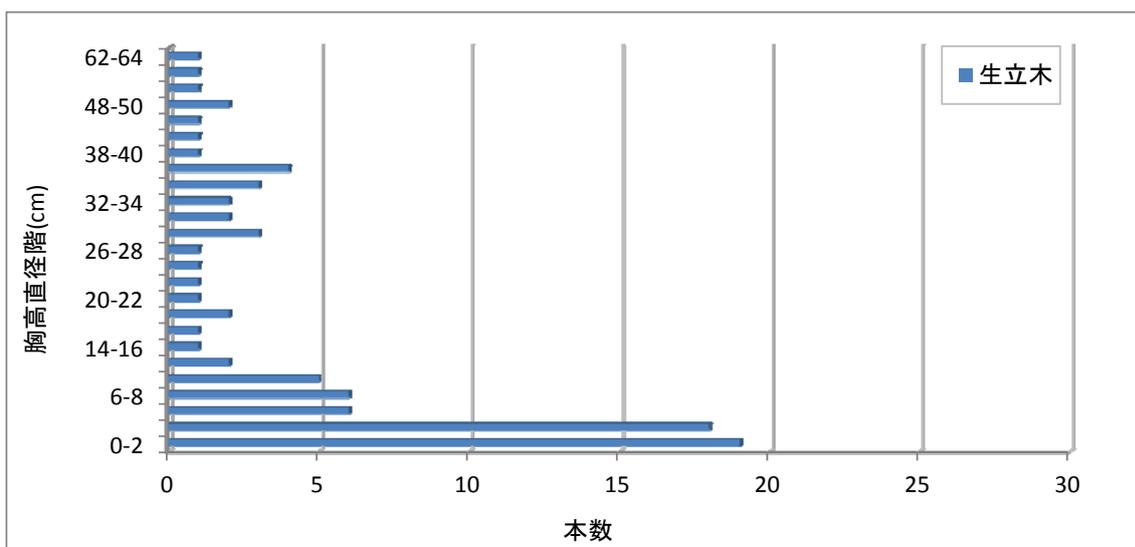
（平成 23 年度報告書より抜粋）

- ・ 上層はハンノキ、ヤチダモ、中層はエゾイタヤ、キタコブシ、下層は主にノリウツギなどから構成される。
- ・ ハンノキの最大樹高は 26.83m、最大胸高直径は 80.5cm ヤチダモの最大樹高は 27.08m、最大胸高直径は 62.1cm であった。
- ・ 林床はミズバショウやヤマドリゼンマイ、クサソテツなどが多くみられ、水たまりがみられるなど、水位が高い場所である。

### ≪樹高階別本数≫



### ≪胸高直径階別本数≫



# 風倒被害地の回復段階について

## ◆森林の再生が進む中で考えられる状況（植栽区の場合）

参考：野幌自然環境モニタリング調査方針（H18）

### 第1段階（台風直後の状況）

項目	状況	イメージ
風倒被害箇所の森林植生	筋状に地拵えが行われ、植栽されている。周囲の残存林分には、天然更新による稚幼樹及び下層植生がみられる。	
歩行性甲虫相	風倒被害箇所において開放性の昆虫が数・種数ともに多くみられる。林内には、森林性の歩行性甲虫が優占する。	
菌類相	風倒被害箇所においては、倒木から発生する木材腐朽菌がみられる。林内と風倒被害箇所における菌類相には大きな違いがみられる。	

### 第2段階

項目	想定される状況	イメージ
風倒被害箇所の森林植生	残存林分などから種子が散布され、多くの天然更新稚樹が林床にみられるようになる。植栽木が十分活着し、樹高成長が旺盛となり、地床を被覆する。	
歩行性甲虫相	開放性昆虫の割合が減少し、森林性の歩行性甲虫の割合が増加する。	
菌類相	林内で見られる菌類相が、風倒被害箇所にまばらにみられるようになるが、風倒木から発生する子実体が依然として多くみられる。	

### 第3段階

項目	想定される状況	イメージ
風倒被害箇所の森林植生	風倒被害箇所全体で植栽木と天然更新個体が混在し、互いに競合しつつ成長して残存林に類する地床、林冠を形成するようになる。	
歩行性甲虫相	開放性の昆虫類は数・種数共に減少し、森林性の歩行性甲虫の組成が、風倒被害箇所と良好な自然林との間で差がなくなる。	
菌類相	風倒木から発生する子実体が減少する。林内でみられる子実体が風倒被害箇所でもみられるようになる。	

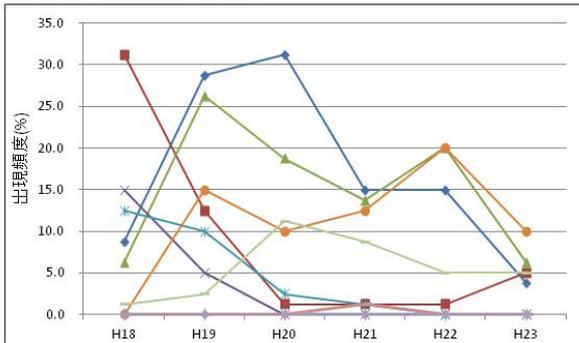
# 菌類相調査の結果概要 (平成 18~23 年)

《主な木材生息性菌類の記録数の推移》 注：表中の数値は出現したコドラート数

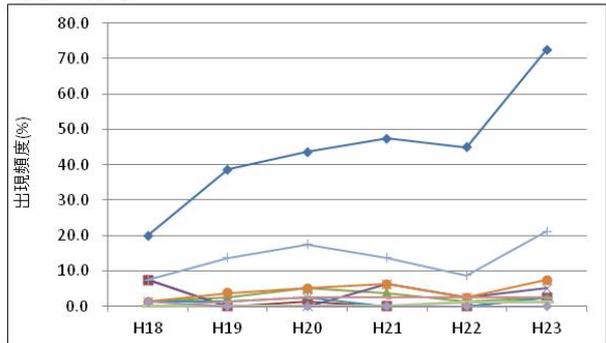
種名	処理区						天然林区						人工林区					
	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H18	H19	H20	H21	H22	H23
ウスバシハイタケ	7	23	25	12	12	3	2	6	6	6	11	17	16	31	35	38	36	58
スエヒロタケ	25	10	1	1	1	4	3	1			3	3	6		1			2
カワラタケ	5	21	15	11	16	5		1	2	1	1	2	1	2	4	3	1	2
トドマツガンシユビヨウキン	12	4					3	2				2	6			5	2	4
アラゲカワラタケ	10	8	2	1			2	1	1				1	1	2			2
レンガタケ		12	8	10	16	8					1	2	1	3	4	5	2	6
モミサルノコシカケ				1			1	1				1	6	11	14	11	7	17
サカズキカワラタケ				1			3	4	7	5	5	6		1	2	2	2	2
キカイガラタケ	1	2	9	7	4	4					1	1					1	1
キアシグロタケ							2	2					1					

《出現頻度の経年変化》 注：出現頻度 (%) = 確認されたコドラート数 / 80【全コドラート数】 × 100

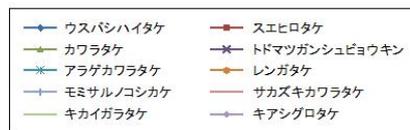
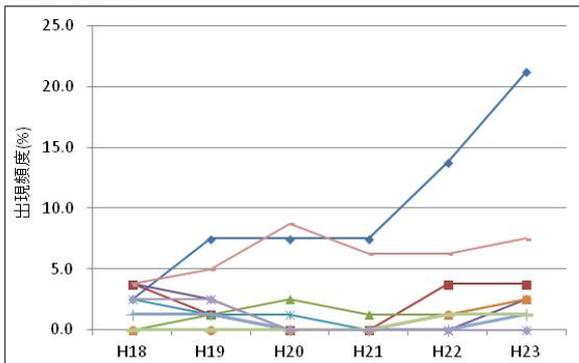
【処理区(活動再生地)】



【人工林区】



【天然林区】



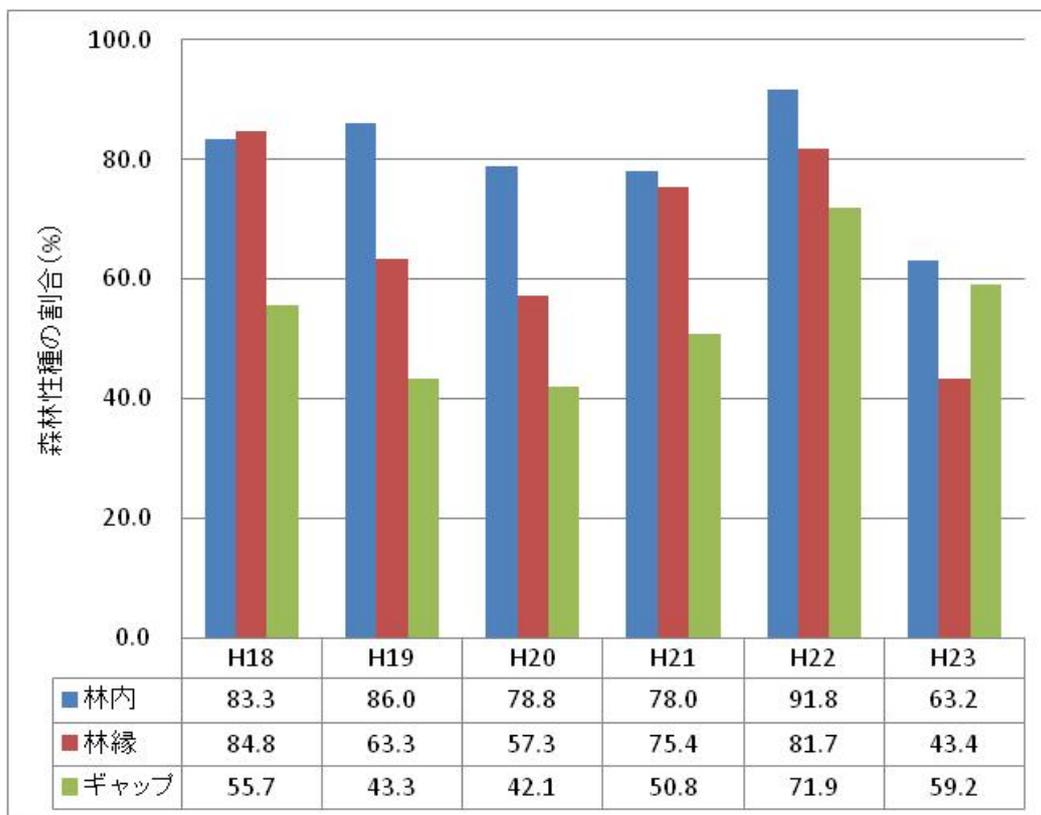
処理区では枯死木の腐朽が進んでいるが、種構成は天然林区や人工林区とは大きく異なり、切り株や枯れ木に生息する菌類で占められている。



回復の傾向がみられるが「第1段階」である。

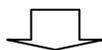
# 歩行性甲虫相調査の結果概要 (平成 18～23 年)

## ≪ 森林性種の捕獲割合 ≫



- ・ 対照区、未・半処理区では森林性種が高い割合を占めている。
- ・ 処理区では 19 年以降、徐々に森林性種の割合が増加してきている。
- ・ 23 年はいずれの区でも森林性種の割合が前年よりも低くなったが、その要因はオオクロナガゴミムシ（開放性種）の捕獲数が急激に増えたためと考えられる。

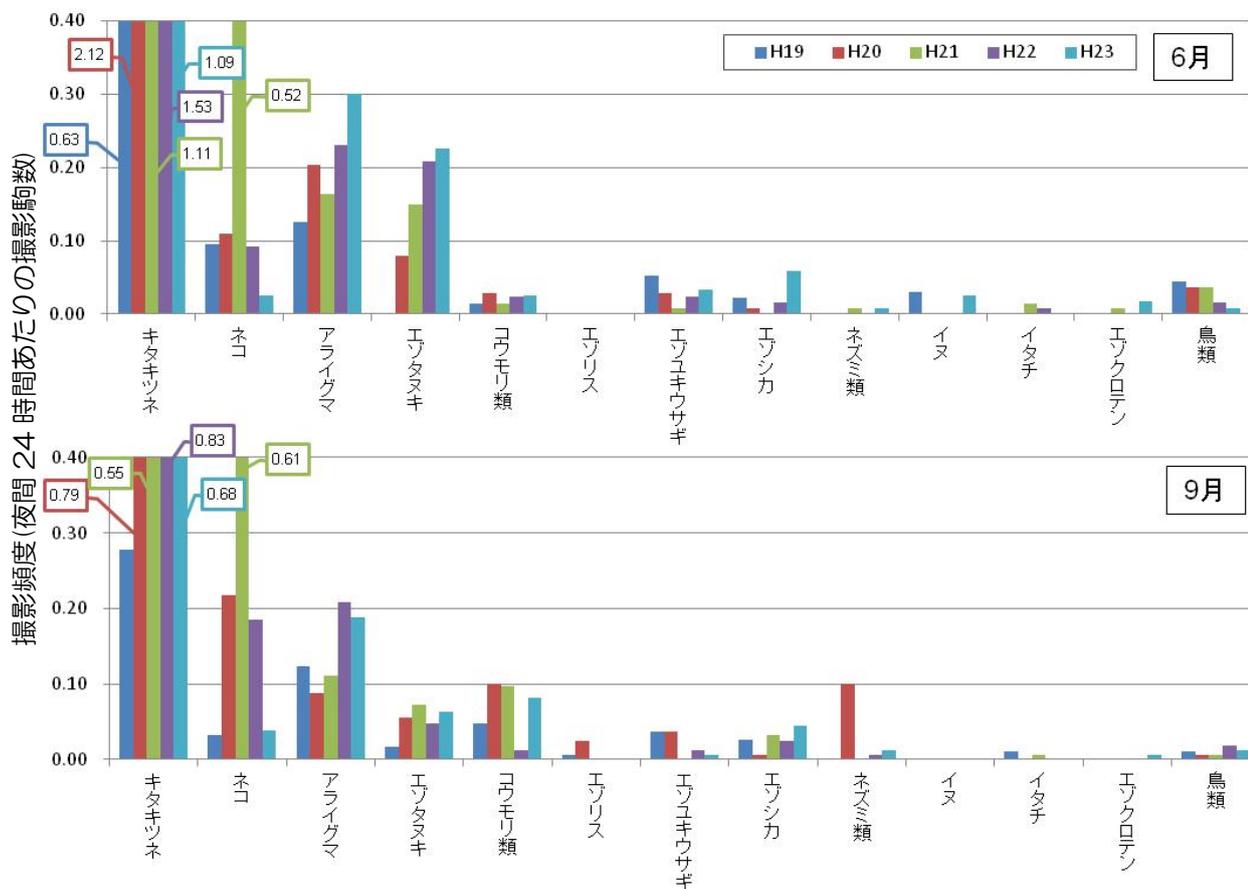
ギャップ内の昆虫相は 19 年が最も攪乱された時期であり、以後、森林性種の組成に少しずつ近づく様相を示している。



森林回復の「第 2 段階」に入ってきている。

# 野生動物自動撮影の結果概要 (平成 19~23 年)

《6月および9月に実施》



- ・キタキツネが最も多く撮影されている。
- ・アライグマは多くの地点で撮影されている。
- ・21年と23年にエゾクロテン（環境省レッドリスト準絶滅危惧種）が撮影された。
- ・食痕調査では、エゾユキウサギ、ネズミ類、エゾシカ類の被食が確認されたが、被害の程度は大きくない。



生息する哺乳類相に目立つ変化はないと推測される。  
 ただし、アライグマ、エゾシカの撮影頻度は増加傾向であり、  
 生息数の動向には注意する必要があると思われる。